早稲田大学 2016年度
一般入試 文学部

# 国語

（問題）

2016年度

〈2016 H28102024〉

## 注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は3～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

| | | | |
|---|---|---|---|
| マークする時 | ●良い | ◎悪い | ○悪い |
| マークを消す時 | ○良い | ◎悪い | ○悪い |

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

| 数字見本 | |
|---|---|
| 0 | |
| 1 | |
| 2 | |
| 3 | |
| 4 | |
| 5 | |
| 6 | |
| 7 | |
| 8 | |
| 9 | |

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）

3825番

⇩

| 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|
| | 3 | 8 | 2 | 5 |

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。

8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

## (一)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ここで普遍主義とは、社会運動の「主体」(誰が何の資格で行動するのか)と、「宛先」(何のために行動するのか)に関する規定である。普遍主義にとって、社会の理念的な構成要素は、あれこれの集団的差異ではなく、個人である。普遍主義的な運動の主体は、集団的な属性や社会的位置からというより、多様な他人たちと同じ社会を共有する一人の個人として運動に参加する。そこで目指されるのは、特定の集団への寄与ではなく、さまざまな個人から成る社会全体の公正さである。

普遍主義は、真の敵対性を再発見させる。この点は修正主義の問題にも関わる。

修正主義とは、マジョリティが自分たちの普遍性なり標準性の体裁を守るため、マイノリティの歴史的従属をなかったことにする、[ I ]である。現代における修正主義は、「なぜわれわれだけ自分たち独自の歴史観を語れないのか」というマジョリティの犠牲者意識に根付いている。たとえば、在日コリアンが民族教育を選ぶことを非難するマジョリティは、しばしば、「われわれが日本人として抑圧されているときに、なぜ在日コリアンだけが自分たちの独自の歴史を教えているのか」という怨嗟を語る。このようにマジョリティのほうが集団的アイデンティティを語っているとき、在日コリアンの歴史的経験の独自性や、彼らに対する特殊な配慮を訴えることは、逆効果であろう。A「ではなぜ日本人にはそれが認められないのか」という逆用を防ぐことが出来ないからである。修正主義の根源にあるマジョリティの犠牲者意識を断つには、マイノリティの歴史的経験や現在における権利そのものを、犠牲者性とは違う仕方で語る必要がある。修正主義の背景にあるマジョリティの犠牲者意識と、それを克服する普遍主義の課題については、イタリアにおける反ファシズム運動の衰退を分析したセルジョ・ルッファットの『反ファシズムの危機—現代イタリアの修正主義』が、ヒントを与えてくれる。

周知のように、第二次世界大戦においてファシズムを経験したイタリアでは、戦後、共和国憲法の発布を経て、反民主的で権威主義的な政治に対抗する反ファシズムの文化が根付いていた。『反ファシズムの危機』でルッファットが分析するのは、その伝統が不可避的に衰退してきた最近の歴史と、同時に登場した新たな歴史観の問題である。

まず、時代が変化した。反ファシズムの経験を持つ年長世代が退場し、冷戦の終わりによって反ファシズムを支えていた社会主義が体制として過去のものになった。その後、イタリアでも、ファシズム(右の全体主義)とスターリニズム(左の全体主義)の両方を民主主義に反する体制として批判するリベラルな常識が浸透した。現存した共産主義(社会主義)体制を最悪の禍だったと考えるルッファットは、こうした経緯を不可避かつ当然と見る。ルッファットには、冷戦に関する[ II ]はない。

ルッファットが批判するのは、反ファシズムの衰退に伴って、歴史に関する観点が変化してしまったことである。そこには二つの段階があった。第一に、ファシズムとこれに対抗したレジスタンス(反ファシズム市民)の政治的な相対化である。「レジスタンスも暴力的だった」と言うことで、ファシズム側の戦闘員を犠牲者として描く視点が登場した。これを象徴する出来事としてルッファットは、二〇〇三年にジャーナリストのジャンパオロ・パンサによって出版された『敗者の血』を挙げている。「解放後の数ヶ月間にイタリアの共産主義者によって行われたファシスト(と反ファシスト)の大虐殺にかんする」同著は、レジスタンスのなかで大きな役割を果たした共産主義者にも過誤があったとすることで、結果的に、レジスタンスが立ち向かったファシストの悪を[ 甲 ]してしまった。実際、『敗者の血』の出版につづいて、イタリアの政治論評から「反なるものをすべて除去する」べきだという訴えが登場したという。

これにルッファットが対置する歴史観は、普遍主義的な歴史判断の核心を示している。「双方の善意(この言葉は、それがどんな傾向を持つものであれ、歴史叙述の協調主義者のキーワードである)がどうあろうとも、イタリア史と世界史の具体的状況は、ガリバルディ旅団のパルチザンが正義の側に立って戦い、サロ共和国の若者たちがまちがった側に立って戦ったことを疑問の余地なく立証している」。ここで語られているガリバルディ旅団とは、ファシストに対して闘ったパルチザンの部隊であり、サロ共和国とは、ナチスに支援されたムッソリーニが連合国軍に対抗して樹立した戦争末期の新たなファシスト政権である。ルッファットが斥(しりぞ)けるのは、ファシストの側にいた人々も個別に見れば何らかの善意を持っていたし、戦争の犠牲になったことは事実なのだから、B歴史叙述においてはファシストとパルチザンの対立を人間の視点から協調させようという提案である。そのような提案には、ファシスト(に共感する現代のマジョリティ)側の倒錯した犠牲者意識が含まれている。

戦禍は、対立するどちらの側にも犠牲者を生む。都市爆撃と原子爆弾の投下を知る私たちは、連合国が善ではなかったことを知っている。しかし、自由や正義について現代世界で通用する普遍的な了解に照らすとき、ファシズム政権と連合国軍が「どっちもどっちだった」とは言えない。連合国軍にいかなる欺瞞があろうと、建前においてすら個人の自由や普遍的な人権を放棄してしまったファシスト政権との対立において、連合国軍の勝利は肯定すべきものである。ところがルッファットによれば、こうした判断は、「誰が犠牲者になったか」という観点から歴史を見る習慣が登場したことで、相対化されてきた。「両方向からの戦火」の板ばさみになったイタリア人民の悲惨な歴史」への着目が始まると、「英雄たちの記念碑化が犠牲者たちの記念碑化へと移行」する。非戦闘員の被害を語り、記録することは当然である。戦争の悲惨さを最もよく物語るのが一般市民の犠牲であることは疑えないだろう。[ III ]

ルッファットは、レジスタンスの名も無き英雄たちの書簡集が出版されたり、パルチザンを讃える石碑が全国に立ったことにも、同じ問題を見いだす。なぜなら、「大義のために命を捧げ、「美しい死」を遂げることができるという点で模範的な人間であるかのように」思われることは、むしろ「ファシストの側に立ったサロ共和国の戦死者たちが、レジスタンスの戦士たちと肩を並べられる」点だからである。何かの犠牲になったこと、その健気さ、苦労、悲惨さ、死の厳かさに魅入られて歴史を語れば、正義と不正を巡る判断が保留されてしまう。問題の核心は、死の事実を中心にして歴史を語る作法にある。これに対

して、普遍主義者にとって「大切なことは死における平等ではなく、生における差異」である。私たちは、戦争の犠牲者について「生における差異」を、すなわち彼や彼女がいかなる敵を持っていたかを判断しなければならない。

昨今、リベラルな信条を持つ人々は、戦争の犠牲者について、あるいは日本軍の蛮行については語っても、戦いにおける正義とその敵の区別を語ることを控えがちである。だが、他者に対する暴力や脅威はいけないといった道徳感情、弱さや被害性への同情だけでは、修正主義的な犠牲者論を破壊することは出来ない。修正主義に対抗するには、歴史に関する普遍主義的な「判断」の習慣を復権するしかない。私たちは最初、普遍主義は修正主義という落とし穴をどう避けることが出来るのか、という問いを立てた。しかし以上の考察は、普遍主義の衰退こそ修正主義の背景であったことを示している。普遍主義によって「も」修正主義に対応できるのではない。修正主義に対する本当の対抗は、普遍主義によって「しか」なしえないのである。

ここで展開した普遍主義は、筆者個人が街頭運動の思想的息吹を分析、発展させたものであり、参加する社会運動の公式見解ではない。だが、この普遍主義を発明してきたのは間違いなく、無名の市民からなる「街の群衆」である。日本社会にはいま、何の報償もない街頭行動に気負いなく参加する、膨大な数の無党派市民がいる。非支配と公正さを求めて戦う彼らの朗らかな怒り、呵責ないユーモア精神は、いかなる理論よりも明晰に公共性の意味を語っている。破綻を予感しながらも恐れなき民衆の足取りにこそ、［Ⅳ］がある。真に創造的な社会運動は新たな公共性の文化を発明し、歴史のなかで自由のために動いた民衆の思想を反復する。ここで示したかったのは、始まったばかりのその文化がもつ理論的骨格と方向性である。言うまでもなく、街頭行動に参加するうえで、筆者の見解に隅々まで同意する必要はない。日本社会は、自由を根底から脅かす危機に見舞われているが、街はつねに、自由を愛する民衆のものである。

（金子勝ほか著『社会はどう壊れていて、いかに取り戻すのか』による）

**問一** 空欄［Ⅰ］に入る最も適切な表現を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 経験の連続
ロ 記憶の不正
ハ 運動の歪曲
ニ 標準の移動

**問二** 傍線部A「「ではなぜ日本人にはそれが認められないのか」という逆用を防ぐことが出来ないからである」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 在日コリアンという少数派の集団性をもちだしても、日本人のマジョリティの巨大な集団性によって蹴散らかされてしまうから。
ロ 在日コリアンの犠牲者意識はごく最近形成されたのに対し、日本人のマジョリティの犠牲者意識は、敗戦からずっと連続しているから。
ハ 在日コリアンの犠牲者性を強調して語るのでは、日本人のマジョリティが自分たちも犠牲者だと主張するのを止められないから。
ニ 在日コリアンの歴史的体験の独自性と、日本人のマジョリティが語る自らの歴史的体験の独自性とは、修正主義において一致しているから。

**問三** 空欄［Ⅱ］に入る最も適切な語句を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ ノスタルジー
ロ ナルシシズム
ハ ヘイト
ニ ハラスメント

**問四** 空欄［甲］に入る最も適切な漢字三字の語句を本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

**問五** 傍線部B「ファシスト（に共感する現代のマジョリティ）側の倒錯した犠牲者意識が含まれている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ ファシスト側にも善意を持つ人々がいたことを強調し、本当の犠牲者はファシスト側にこそ存在すると逆に思い込もうとする、ということ。
ロ 歴史叙述の協調主義者は、普遍主義の観点からファシストとパルチザン、加害者と犠牲者という区別を認めない、ということ。
ハ 現代のマジョリティは、人間はみな同じという観点から、ともに正義の側にいた犠牲者だと強引にみなそうとする、ということ。
ニ 本来加害者の側であったにもかかわらず、それを忘れ自分も犠牲者だと思い込もうとする逆の意識をともなっている、ということ。

問六　空欄 Ⅲ に入る最も適切な文を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　しかし、犠牲者性への集中は、自由や正義といった普遍性に関する判断を骨抜きにしてしまう。

ロ　だが、犠牲者性というなら、戦闘員、非戦闘員を問わず美しい死として語られねばなるまい。

ハ　とはいえ、一般市民の犠牲の記念碑化は、英雄たちの記念碑化という誤った神格化と同じ問題を有する。

ニ　にもかかわらず、勇敢に戦った英雄たちへの称賛が完全に消えてしまうのは、不公平だろう。

問七　空欄 Ⅳ に入る最も適切な表現を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　修正主義の是正

ロ　未来社会の萌芽

ハ　社会運動の真理

ニ　街頭行動の危機

問八　次の中から本文の論旨に合致しないものを二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　無名の市民からなる「街の群衆」は、一人一人ばらばらな個人としてあるのではなく、特定の集団性をつくりだしている。

ロ　衰退した普遍主義を現代によみがえらせたのは、さまざまな個人から成る社会全体の公正さを求めて活動する「街の群衆」である。

ハ　修正主義の登場は、普遍主義の衰退にあるのだとすれば、普遍主義の復権こそ修正主義への真の対抗となる。

ニ　自由と正義の観点から見るなら、それらを放棄したファシズム政権と戦った連合国軍側の勝利は肯定すべきである。

ホ　右であれ左であれ恐怖の全体主義は、それを体験的に知っている年長世代の退場によってのみ、歴史から一掃できる。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「イメージ」とは何か。一般には、何かあるものを再現表象するのがイメージだと考えられよう。しかし私が考察したいのは、実在するものの形を写し取ったものというより、むしろ絶対的に失われたもの、「不在」そのものを表象したものといえるかもしれない。神によりこの世に送られたキリストは、かつて人として地上に存在したのだとしても、存命中の彼の顔かたちを写したイメージは存在しない。昇天後、その身体は失われ、この世の終わりに再臨するときまで、人は彼の姿を知りえない。とすれば「キリストの顔」を描いたイメージとは、オリジナルなき表象、「不在」それ自体の［Ⅰ］といってよいだろう。

そうはいっても、キリストをかたどる絵画や彫刻は世界中に溢れかえっているではないか――そう訝しむ声もあるにちがいない。それは確かだ。しかしこうした造形物の背後には、現世の人間の目には捉えがたい神的存在を形にするための論理と努力の歴史が横たわっている。偶像を否定するユダヤ教を母胎とするキリスト教にとって、イメージの制作や崇敬が擁護されるには、乗り越えねばならない課題がいくつも存在した。聖なるものの不可視性や表象不可能性に挑んだ芸術家たちの営みは**タ**[1]**キ**にわたる。

たとえば、「私は世の光である」（「ヨハネによる福音書」）という隠喩に基づいて、キリストを青白い光源や太陽に擬えて描いたり、光り輝き刻々と変容するその顔の不可視性を、芸術家の技ではなくガラスや金箔といった材質の力で示したり、あるいは現世における限定された「見神」を暗示して、キリストの顔を影のごとく暗く描くといった工夫などが思い起こされる。神を拝もうとするものを「アポスコペイン（遠くを見やる視線）」とともに描くことで、その絶対的距離、次元の違いを示す場合もあれば、ジョットの描いた天使たち（A バロンチェッリ祭壇画チマーザ部分、サンディエゴ美術館）のように、神の輝きを直視できず鏡越しに近づこうとする表現も意味深い。神的存在は、見ることの限界、表象の閾に宿るのだ。

［a］目にしえない、あるいは目にしてはならないものを見えるものにするというイメージのパラドクス。それはイメージの展示や演出とも無縁ではない。聖なるもののイメージは、見えるものとして造形化されたにもかかわらず、メデューサさながらときに目にしたものを失明させたり、天変地異を引き起こしたりすると考えられた。それゆえ、聖龕（聖なるものを収める容器）やヴェールで覆い隠され、不可視のまま、ただそこに存在するということだけが暗に示されることがある。あるいは、見るものに眩暈を引き起こすようなまばゆい額に挿入されて、像そのものは暗く**コウタイ**[2]し判別しえないかたちで示された。

［b］十九世紀に大学制度のなかに生を享けた美術史学が、芸術的価値をそなえるとされる作品をカント的な距離をもって客観的に分析することに心を砕いてきたとすれば、鑑賞者の心理や受容様態をも巻き込むイメージの問題は、ときに考察対象から逃れかねず、それらを十分に理解するには困難をともなう。芸術家の技巧を拒み、キリストの身体の「痕跡」に起源するアケイロポイエトス・イメージ（人の手によらない表象）や、それを忠実に複製することに意味をもつ「作者不詳」のイコンのあり方は、近代以降の「芸術」や「芸術家」という概念を前提にしていては理解することができない。しかも奇跡を起こし、信者を慰安し、ときには威嚇さえする、いわば［Ⅱ］イメージにアプローチするには、あらたな視座が求められよう。

こうした対象に近づくために、私は、歴史人類学、あるいはイメージ人類学と称される研究動向へと視野を開くことにした。一九七〇年代頃から、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、歴史学では、民族学や民俗学、社会人類学や文化人類学のアプローチを参照しようとする傾向が高まり、それらとの対話に**リッキャク**[3]する「歴史人類学」と称される新たな方法論が模索されてきた。たとえば、中世史家ジャン＝クロード・シュミットは『中世歴史人類学試論』のなかで次のように述べている。

歴史家が儀典上の表象ないし慣行を理解しようとする場合に、中世ヨーロッパの神の表象に関連して、そもそも「宗教」という観念そのものは正しいのか。今日われわれが定義するような意味での「宗教」の観念は、われわれの文化が考え出した比較的新しい産物なので、十八世紀の啓蒙思想の時代より以前に遡ることはない。むしろ、人類学者のように象徴体系について語るほうがよい。それはつまり、一社会の表象と実践の全体に行き渡っている信念や神話や儀典のことで、今日われわれはそれらのあいだに B「経済」や「社会」あるいは「宗教」を識別する傾向が強いのだが、それこそ時代錯誤にほかならない。

［c］こうした議論を、美術史学における「芸術」の概念にあてはめても、あながち見当違いではないだろう。私が注目している多くの作品は、近代以降に遡及的に再定義された C「芸術」という観点からは見過ごされかねないのだ。

さらにシュミットは、「人類学」という言葉で、自らの文化の慣習と価値から距離をとり、対象を理解するにふさわしい語彙や観念を意識的に探究する態度、しかも、個々の現象を、その内容ではなく、多くの表象と象徴的な行為の体系や諸関係を捉えることと考えている。つまり、「人類学的分析とは、身体、所作、象徴的器物、図像、祭儀の時や場が単に思想や神話を表現するのみならず、それらを組織し、存在させもする様態を解明する」ものなのだ。さらに作品とそれを取り囲む空間、そして受容者の反応も視野に入れて、D イメージが息づいていた場の様態そのものに目を向けることへも導かれるだろう。

［d］歴史学のこうした動向と並行して、美術史学においても、自らの学問領域を客観視すべく、従来の学の前提を問い直し、隣接諸分野との領域横断的な対話を重視する傾向が高まりをみせた。素朴な実証主義や歴史主義を反省し、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西洋中心主義的な価値観が見直され、［Ⅲ］反省を自らに課す動きがみられはじめたのだ。

甲

なかでも、狭義の「芸術」という概念を超えて、さまざまな文化におけるイメージ一般の価値や機能や力を捉え直し、像単体ではなく、受容者とのあいだで紡がれるインタラクティヴな関係や受容空間も視野に入れたイメージ人類学的研究が囁かれはじめる。社会的過程、礼拝儀礼、交換のメカニズム、神話の自己叙述をめぐる研究など、人類学が構築してきた概念は、イメージ（必ずしも芸術作品に限定されない）がいかに制作者や受容者に何らかの意味や力を伝達するようコード化されているのかを構造的に理解する可能性へと導いた。

（水野千依著『キリストの顔――イメージ人類学序説』による）

**問九** 空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る最も適切な語句を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

Ⅰ イ 理想化　ロ 抽象化
　ハ 現前化　ニ 象徴化

Ⅱ イ 「歴史」に根付いている　ロ 瞬時に「変容」を繰り返す
　ハ 「重量」感に満ち満ちた　ニ 「生ける」存在としての

Ⅲ イ 意味論的　ロ 方法論的
　ハ 超越論的　ニ 解釈論的

**問十** 次の一文が入る最も適切な箇所を、本文の空欄 a ～ d の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

このように聖なるもののイメージについて考えを巡らそうとすれば、わたしたちは、自ずと従来の伝統的な美術史の枠では捉えがたい現象と向き合わざるをえないことになる。

**問十一** 傍線部A「神的存在は、見ることの限界、表象の閾に宿る」の説明として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 神的存在は、対象をそのまま写し取るというあり方を超えた、不在を表象しようとする場から生まれる、ということ。
ロ 神的存在は、何かを見えるように形象化する古典的な概念を壊すために、絶対的距離を伴って描かれる、ということ。
ハ 神的存在は、見てはならないものを表現するときに初めて現れるため、そこで用いられる材料が重んじられる、ということ。
ニ 神的存在は、見ることのあり方に再考を促し、世界を複雑で多様性に満ちたものとして提示する働きを持つ、ということ。

**問十二** 傍線部B「「経済」や「社会」あるいは「宗教」」は何によって支えられているか。それを示す十字以上十五字以内のひと続きの部分を、傍線部Bより前の本文から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

**問十三** 傍線部C「自らの文化の慣習と価値」の説明として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 一定の型にはまった概念や思考の枠組
ロ 人間の精神に根差した普遍的な心の姿
ハ 文化は人間が作り出すと考える合理的な思考
ニ それぞれの時代を反映した明快な文化特性

**問十四** 傍線部D「イメージが息づいていた場の様態」の説明として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 歴史のなかの一場面をイメージし体系化する思考法
ロ 表面的な現実に潜むイメージを生み出す機能
ハ 限りなく変容するイメージがあらわす世界の多様性
ニ 世界がイメージに満ちているという奥深い世界像

**問十五**　次の三つの文を正しく並び替えて空欄 **甲** に入れるとき、二番目に来るものはどれか。最も適切なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

**イ**　さらに古典的な美的ヒエラルキーに基づく研究対象の措定が疑問視され、現代芸術をも射程に入れたさまざまな時代・文化圏の造形物を相対的に捉え、作品を媒介するメディアやテクノロジーの問題も注目された。

**ロ**　新しい美術史研究のモデルが人類学や社会学に求められ、社会的・文化的コンテクストにおけるテクスト＝美術作品のあり方を問う視点が前景化する。

**ハ**　加えて、作品よりも、作品記述や解釈といった美術史の言説自体を問い直すメタ美術史的研究も進められた。

**問十六**　次の中から本文の論旨に合致しないものを二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

**イ**　「見えないもの」と「見てはならないもの」という性格を分析することで、単なる再現行為によって生まれる平板的なイメージを超える、新しい意味あいが明らかになってくる。

**ロ**　イメージの枠組を固定したものでなく、その輪郭を押し広げる形で考えていかないと、イメージの現代性は理解できない。

**ハ**　キリストの図像研究を新しくするためには、図像のさまざまなパターンを数多く集め、その関係性を明らかにすることが必要である。

**ニ**　生命を付与され、力をそなえた存在として、イメージを新しく捉え直すことが大切である。

**ホ**　現代注目すべきイメージは、その中心的な実体というより、歴史的・社会的な反映である付属物の存在によってこそ支えられているはずである。

**問十七**　傍線部**1**～**3**のカタカナの部分を漢字に直せ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

## (三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

また、この男、市といふところにいでて、透影によく見えければ、ものなどいひやりけり。受領などの娘にぞありける。まだ、男などもせざりけり。后の宮のおもと人にぞありける。さて、男も女も、おのおの帰りて、男、尋ねておこせたる、

ももしきの袂の数は知らねどもわきて思ひの色ぞこひしき

かくいひいひて、あひにけり。

そののち、文もおこせず、またの夜も来ず。かかれば、使人など、わたると聞きて、「人にしもありありて。かう音もせず、〈イ〉みづからも来ず、人をも奉れたまはぬ[a]こと」などいふ。[1]心地に思ふことなれば、くやしと思ひながら、とかく思ひみだ[b]るるに、〈ロ〉四五日になりぬ。女、ものも食はで、音をのみ泣く。ある人々、「なほ、かうな思ほしそ。人に知られ[c]たまはで、異ごとをもしたまへ。[2]さておはすべき御身かは」などいへば、ものもいはで[3]籠りゐて、いと長き髪をかき撫でて挟みつ。使ふ人々嘆けど、かひなし。

A 、来て、つとめて、人やらむとしけれど、[4]官の督、にはかにものへいますとて、率ていましぬ。さらに帰したまはず、からうして帰る道に、亭子の院の[5]召使来て、やがてまゐる。大堰におはします御供に仕うまつる。そこにて二三日は酔ひまどひて、〈ハ〉もの覚えず。夜ふけて帰りたまふに、いかむとあれば、〈ニ〉みな人々つづきて、たがへにいぬ[d]。この女いかに思ふらむとて、夜さり、〈ホ〉心もとなければ、文やらむとて書くほどに、人うちたたく。「たれぞ」といへば、「尉の君に、もの聞え[e]む」といふを、[7]さしのぞきて見れば、この女の人なり。「文」とてさしいでたるを見るに、切髪を包みたり。あやしくて、文を見れば、

あまの川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり

B になるべしと思ふに、目くれぬ。返し、男、

世をわぶる涙ながれて早くともあまの川にはさやはなるべき

ようさり、いきて見るに、いとまがまがしくなむ[f]。

（『平中物語』による）

**注**
官の督…右兵衛督。
亭子の院…宇多法皇。
大堰…大堰川。現在の京都嵐山あたりを流れる。
尉…右兵衛尉。

**問十八** 傍線部1「心地に思ふことなれば」の意味として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
イ 女は自分で考えてみても、男を通わせるのが早かったと思っていたので。
ロ 女は自分でも、頼みにできない男を通わせてしまったと思っていたので。
ハ 女の召使いは、男を通わせてはいけないと思っていたところなので。
ニ 女の召使いは内心、恋多き男だと思い始めていた時だったので。
ホ 女は近頃、男がなぜ通ってこないのかと疑問に思っていたので。

**問十九** 傍線部2「さておはすべき御身かは」の意味として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
イ そうしていらっしゃるようなご身分でありましたら。
ロ そのままいらっしゃってかまわないお方でしょう。
ハ そのままいらっしゃってよいお相手でしょうか。
ニ そうしていらっしゃってよい方ではありません。
ホ そのままいらっしゃるべきご身分でしょうね。

**問二十** 傍線部3～7の主語をイ「男」、ロ「女」、ハ「イ・ロ以外の人物」に分類するとき、それぞれどれに該当するかをイ～ハの中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

**問二十一** 波線部a～fのうち、助動詞を三つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

**問二十二** 次の語句が入る最も適切な位置を、文中の〈イ〉～〈ホ〉のうちから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

方ふたがりたれば、

問二十三　空欄 A に入る最も適切な語句を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　あはむとするやうは
ロ　来ざりけるやうは
ハ　文奉りたるやうは
ニ　率ていますやうは
ホ　通ひけるやうは

問二十四　空欄 B に入る最も適切な語（漢字一字）を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十五　『平中物語』の成立から最も隔たった時期に成立した作品を一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　徒然草　ロ　方丈記　ハ　文華秀麗集　ニ　俊頼髄脳　ホ　建礼門院右京大夫集

（四）次の文章は、孔子が故国魯を追われ、陳・蔡・衛・宋で災難に遭ったことを背景としている。これを読んで、あとの問いに答えよ（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

孔子窮於陳・蔡之間、七日不火食。孔子絃歌於室、顔回択菜。子路・子貢相与言曰、「夫子再逐於魯、削迹於衛、伐樹於宋、窮於陳・蔡。殺夫子者無罪、藉夫子者無禁。夫子絃歌鼓琴、Ⅰ 嘗絶音。君子之無恥也、若此乎。」顔回無以応。入告孔子。孔子推琴、喟然而歎曰、「由・賜小人也。召而来。吾語之。」子路・子貢入。子路曰、「如此者、可謂窮矣。」孔子曰、「是何言也。君子通於道、之謂通、窮於道、之謂窮。今丘抱仁義之道、以遭乱世之患。其何窮之為。故内省而不窮於道、臨難而不失其徳。天寒既至、霜雪既降、A吾是以知松柏之茂也。陳・蔡之阨於丘、其幸乎。」孔子返瑟絃歌。子路抗然執干而舞。子貢曰、「吾不知天之高也、不知地之下也。」古之得道者、窮亦楽、通亦楽。所楽非Ⅱ也。道得於此、則窮通為寒暑風雨之序矣。

（『荘子』譲王篇による）

**注** 削迹…足跡を削りとって、往来することができないようにする呪術。
伐樹…宋の司馬である桓魋が孔子を殺そうとして、孔子が休んでいた木を引き抜いたこと。
阨…災い。　丘…孔子の名。　抗然…勇壮な様子。　干…盾。

**問二十六** 空欄 Ⅰ に入る最も適切な一字を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 況　ロ 尚　ハ 当　ニ 未　ホ 寧　ヘ 必

**問二十七** 傍線部A「吾是以知松柏之茂也。」の意味として最も適切なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ わたしはこのため松柏が厳冬を越せない意義を知った。
ロ わたしはこのため松柏が寒さに負けない理由を知った。
ハ わたしはこれにより松柏がうっとうしい理由を知った。
ニ わたしはこれにより松柏が重んじられる理由を知った。
ホ わたしは人々が好んで松柏を墓に植える意義を知った。
ヘ わたしは人々が松柏を寒い時期に眺める理由を知った。

**問二十八** 空欄 Ⅱ に入る最も適切な二字を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 窮通　ロ 絃歌　ハ 仁義　ニ 道徳　ホ 無罪　ヘ 乱世

**問二十九** 次の中からこの文章の内容に最も合致するものを一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 君子と小人に、尊卑があるのは、君子が道を体現していることによる。
ロ 君子は道を得ることにより、乱世の患に遭っても通ずることができる。
ハ 孔子のように、仁義の道を極めると、君子は通ずることが可能となる。
ニ 孔子が魯を逐われたように君子も窮するが、後に通ずることができる。
ホ 道を得れば、順逆の境遇などは、自然の推移と同じようなものである。
ヘ 道こそが、万物の窮極の存在であり、それを得ることが自然に繋がる。

〔以下余白〕

〈2016 H28102024〉

| 受験番号 | 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | |
| 氏名 | | | | | |

（注意） 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

（採点欄）

（一） 問四

（二） 問十二

（二） 問十七

（三） 問二十四

〈2016 H28102024〉

| 受験番号 | 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | |
| 氏名 | | | | | |

（注意） 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

# 国語（記述解答用紙）

（一） 問四

（二） 問十二

（二） 問十七

1

2

3

（三） 問二十四